

《紅葉賀》

(前略：現代語訳中)

御出産の予定であった十二月も過ぎてしまい、みな心配で、  
今月はいくら何でもと、宮人たちもお待ち申し上げ、帝におか  
れましても、そのお心づもりでいるのに、何事もなく過ぎてし  
まいました。

「御物の怪のせいであろうか」

と、世の人々も噂申し上げるのを、藤壺の宮は、とてもつらく、

「このお産のために、きっと私は死んでしまうのだろう」

と、お嘆きになると、ご気分もとても苦しくなって体調をお崩  
しになってしまおうのでした。

源氏の君は、ますますあのことと思い合わせて、御修法など  
を、はつきりと事情は知らせずに方々におさせになります。

「世の無常につけても、このままはかなく終わってしまうのだ  
ろうか」

と、あれやこれやとお嘆きになっていると、二月十日過ぎのころに、男御子がお生まれになったので、すっかり心配も消えて、帝も宮家の人々もお喜び申し上げなされます。藤壺の宮は、

「長生きをさせてほしい…」

とお思になるのは、それはそれで辛いことですが、

「弘徽殿などが、呪わしそうにおっしやっている」

と聞いたので、

「私が死んだとお聞きになったなら、人は笑いの種にするのだから」

と、お気を強くお持ちになって、だんだん少しずつ快方に向かつていかれたのでした。

お上が、早く御子を御覧になりたいとおぼし召されることと  
いったら、もちろん限りがないほどです。源氏は、あの、秘密の記憶のこともあるので、ひどく気がかりで、人のいない時に  
参上なさって、

「お上が心配申し上げなさっているので、私がまず拝見して詳しく  
奏上しましょう」

と申し上げなさりますが、藤壺の宮が、

「まだ見苦しいのですので」

と言つて、お見せ申し上げなさらないのも、ごもつともなことです。というのは、本当に運命のいたずらとでも申しませうか、感心するほど父親に生き写しでいらつしやる顔形、見紛うはずもありません。藤壺の宮は、御心に巣くつた鬼にひどく苦しめられ、

「女房たちがこの子を拝見しても、不思議に思つていたほどの月勘定の狂いを、どうして不審に思わないでしょうか。それほどでないつまらないことでさえも、汚点として探し出そうとするこの世の中で、どのような噂がしまいには漏れ出てしまうのでしょうか」

と思ひ続けなさるにつけ、わが身だけが救いようもなく辛く思われるのでした。

(中略…現代語訳中)

藤壺の宮は、四月になって帝の下へ参内なさりました。御子は、二ヶ月の割には大きく成長なさっていて、だんだん寝返りなどをお打ちになるまでになっていました。恐ろしいまでに、源氏と違う所のないお顔つきを、帝はもちろんご存知ないことなので、

「並ぶ者のない美しい人どうしというのは、なるほど似通っていらつしやるものよ」

と、お思いあそばすのでした。格別に思いを寄せ可愛がることといったら、この上もありません。帝は、源氏の君を、限りなく愛しい者として思し召しになっていながら、世間の人々がそれをお許し申し上げなさらなかったことによつて、お住まいにも置き申し上げられないままになっていたことを、満足せず残念にお思いになつていきますので、源氏の君が臣下としてはもつたいないご様子、容貌で、ご成人していらつしやるのを御覧になるにつけ、心がしめつけられるように思し召すのです。そんな帝が、

「このように高貴な母親から、同じ光で照らされてお生まれに

なつたわけだから、たしかに疵のない玉よのう」

と、お思いあそばして大切になさるので、藤壺の宮はどんな時も、胸の痛みの消える間もなく、安らかでない思いをしていらつしやるのでした。

いつものように、源氏の君が、こちらで管弦のお遊びをなさつていると、帝は御子をお抱き申し上げなさつて、

「御子たちは、大勢いるが、そなただけを、このように小さい時から一日中見てきた。それゆえ、思い出されるのだろうか。

たいそうよく似ている。とても小さいうちは、皆このように見えるのであろうか」

と言つて、たいそうかわいらしいとお思い申し上げなさつていきます。

源氏の君は、顔色が変わる心地がして、恐ろしくも、かたじけなくも、嬉しくも、悲しくも、あちこちに移ろうような気持ちで、涙が落ちてしまひそうです。御子の、何かをお話になつたり、少しお笑いになつてゐる様子が、とても恐ろしいままでにかわいらしいからといつて、源氏が、我ながら、この御子に似

ているのは大変に辛く感じられるというのは、あまりに度を越していませんでしょうか。一方、藤壺の宮は、どうにもいたたまれなく、冷汗をお流しになっているのでした。源氏の君は、皆と一緒にいると、かえって複雑な思いが乱れるようなので、退出なさってしまいました。